

空からの刺激とともに



旭
スズエ

黄色い山肌、切り崩した崖、山のうえには高圧

線、これを避けるように、途方もなく大きい気球がゆるゆると静かに進んで行く。これが私の初めての永久記憶なのです。この時の気球が、ドイツのツエッペリン飛行船で、その飛んでいる姿が、回りの風景とともに、今もはっきりと私の脳裏に

焼き付いています。

この記憶が正確であるかを、近代日本総合年表で調べると、ツエッペリン飛行船が日本に来たのは、昭和四年八月となっています。私の永久記憶は満一歳二カ月からじまったというわけです。ついでに、社会面を見ると昭和三年という年は不

況のどん底で世の中は大変だったようです。

何も知らずにこの世に出て来ましたが、玄関前で写した生後一五〇日目という父に抱かれて緊張している写真がアルバムの一頁めを飾っています。

生まれたのは、横浜市の外れ、鶴見区です。今から考えると新興住宅地だったのでしょう。新しい家がどんどん建っていました。三つ池公園の近くで、その頃は縁も多く南斜面に広い庭をもった住宅が並んでいました。

家では、いつも大家族でした。妹が生まれ、弟



ができ次第に兄弟が増え、それに祖母が半身不随で寝たきりでしたので、お手伝いさんと親戚の行儀見習いの若い人など一〇人を越える人がいました。子どもはあまり外出はしないで、庭で「ままたごと」に明け暮れていました。もちろん幼稚園など考えたこともなかったようです。長女でしたので、いつも弟妹のお守りをしながら、カルタ、お手玉、いろは積み木などで、自分も遊んでいたようです。

魚、肉、野菜など御用聞きが毎日来ますので、お使いの用事もなかったようです。楽しみはお菓子屋さんの御用聞きでした。一〇時ころになると、必ずブリキの五段重ねの容器に、それぞれ分類されたお菓子が並べられ注文を取って三時前に届けてくれるというのです。試食も可能でとても楽しみでした。

小学校時代

鶴見の一番奥、田圃のなかの小学校でした。毎日畦道を通り、オタマジヤクシやメダカと遊びながら通う道草の名人でした。始めは男子組と女子組だけでしたが、途中で男女組が増え、私は新設の組に入れられました。

木造の校舎で校庭は広いし、若い先生が多く体育に熱心な学校でした。女の子は自転車など乗れなくてもよいと、自転車が買ってもらえなかった私は、友達の大人乗りの自転車で練習をして、もちろん足が届きませんので横から足を入れる乗り方ですが、マスターしたのも、この校庭です。ドッチボールが盛んで毎日暗くなって学校から締め出されるまで遊び、大きな声で歌を歌って皆で帰りました。

いろいろ思い出すのですが勉強している姿はな



かなか出て来ないのです。勿論自分の机などはなく、ちゃぶ台の上でやったのか、コタツの上でやったのか、宿題はやっていたと思うのですが、あとは頭に浮かびません。

この頃のクラス会が毎年ありまして、四〇名中一五名位が集まります。そして朗読は素晴らしいと思ったとか、算術はよくできたとかいわれませんが、不思議と私の記憶の中には何も残っていません。

運動会では、選抜体操と言って、保護者席の前で、日頃の技を見せるのですが、鉄棒までだし

て、回転技も今で言う大回転をやることになり、練習をしました。選ばれたものだけですが私も入っていました。また夢中でやったのでしよう、前日の練習の時に手を滑らせ落ちた時に逆手をつけてしまいました。自分で手を見ると全然違う形なのでびっくりし、意識がなくなつたらしいのです。担任の先生が柔道二段だったので、ギョツと

ひっぱり応急手当をして、病院へ行きました。この時のつき方が悪く今でも吊り革に捕まるとときには、気になります。

日中戦争が始まって少しずつ影響は出て来ましたが、小学生の暮らしはまだ平穏でした。



卒業後の事を考える時期になると学級の半分が高等小学校に進み、女学校に進む人のほうが少ないにはびっくりしました。私は県立の女学校を受験することになりました。合格通知を父が神棚に供えているのを見てそんなに嬉しいことなんだと、心からよかったですと思いました。

女学校時代 (一)

通学定期をもって鶴見駅から横浜駅まで電車通学になりました。神奈川県下から秀才の集まる学校でしたので、今までの学校とは全然異なり、緊張の連続の一年生でした。

制服もこの年から全国共通の服が統一され、ヘチマ襟のあまり格好のよくないものに変わって皆がっかりしました。でもクラブ活動は、盛んでテニス部に入り、放課後の活動が楽しみでした。プールもありましたが、水泳は本牧間門まむらで集中的

に練習しました。私はその時風邪で泳ぐことが出来ず、それ以来水泳は苦手な物になってしまいました。最近になって六〇歳を過ぎてから筋肉を鍛えるために頑張っていますがその時サボった罰だと思っています。

楽しい学校にも少しずつ緊張した空気が入って来、朝礼の時など分列行進を厳しく訓練するようになって来ました。「歩調とれ」という号令の下に皆が一斉に足を高く挙げて行進するのです。

「かしら右」など、大きな声で叫ばせられました。

それでも、二年生までは、平穩に勉強することが出来ました。ある日、警戒警報がなるので、不用意に二階の踊り場から覗くとアメリカのグラマンが一機偵察に来たのをみました。何もしないで帰りましたが、それから段々情勢が険悪になって来ました。



授業は今までと変わりなく、続けられ英語の授業も普通に続いていました。しかし世の中は、敵国語は学ぶ必要なしと、英語廃止の雰囲気になって来ました。材料がなくなって来ました。裁縫も和裁を厳しく教えられ、裕の着物から、帯や羽織りまで次々に縫わせられました。私は小学校のときから、弟や妹のものを縫ったり、編んだりしていたので平気でしたが材料を用意するのが大変でした。

四年生になると同時に、動員の発表がありました。四年生全員が鶴見区の森永製菓工場です。鶴

見ですので私は一番近く、家から歩いて通えるようになりました。世の中は食べるものも手に入りにくくなり、お菓子などはもう夢の世界でした。しかし、工場の中では、常に甘い香りが満ちあふれていました。私たちははじめ、チョコレートを計測する仕事でした。次は金平糖の袋詰めでした。きれいに洗い込まれたスコップ、大きな長靴で山積みの金平糖の中に入り、すくっては袋詰めするので、望んでもできない仕事でした。

帰りには、門衛さんのところで、お菓子を持ち出さないように検査されましたが、不思議と食べたいとは思いませんでした。楽しい仕事はいつま



でも続くものではありません。

世の中はしだいにものが無くなり、疎開という言葉が聞くようになりました。学童疎開と言つて子どもだけを田舎に連れて行き生活させるということです。この頃、父が病気になる栄養をとらねばならなくなったことと、弟妹がばらばらに疎開をすることになるといふので、ついに家族全員で田舎に疎開することになってしまいました。

女学校時代 (二)

折角の楽しい職場を離れ、友達ともわかれ、私は静岡県磐田に疎開し、県立高女に転入学しました。静岡では授業が続いていました。授業の間には、病院実習があり、看護婦の見習いをさせられ、勉強をして、三等看護婦の免許を取得させられました。すぐに戦地へ行って役立たせるためです。七月になると、豊川の海軍工廠への動員命

令が来ました。家を離れ宿舍生活です。

出発当日学校から駅まで鼓笛隊の先導で、行進しました。旗の波と学徒動員の歌で、もみくちゃにされながら汽車は駅を離れました。

大きな旋盤で難しい作業を、またヤスリで細かい作業をとそれぞれ油にまみれての格闘になりました。工場は大変大きく、大学生や中学生など学生がたくさん動員されていました。私たちは三交代で卒業を迎えるまでお国の為に働きました。そのとき胸につけた乙旗は今でも持っています。

卒業式の歌は「海行かば」でした。翌日からも作業は続き、防空壕もない所だったので学校工場に戻ることに、磐田に戻って来ましたが、今度は磐田で空襲を受け、私は機銃掃射でねらわれました。壕に飛び込み難無く逃れましたが、アメリカ兵の笑って居る顔が忘れられません。

振り返って

平和の使節ツエッペリン号から、私をねらった飛行機まで、私の子ども時代は戦争とともにありました。今まで自分の過去のことを連続した形で考えたことはありませんでしたが、この度幾つかの出来事を「想起」してみても思いました。切れ切れのその体験は、あるときはゆっくり、あるときは性急に意識しない子ども達に直接影響をもたらしていました。

ただ流されただけの子ども時代、これからは、翻弄される事なく、それぞれが自分を生かして進めるような「平和」の世界を築いて行くことが、大人の責任と 생각합니다。

(東京家庭裁判所調停委員)